

## 実るほど頭（こうべ）を垂れる稲穂かな

昭和五十四年、この年は、養護学校義務制が始まった年度であり、これにより、障害のあるなしに関わらず、全ての児童生徒が義務教育を受けることになりました。ちょうどその年に、私は大学を卒業し、教員として特殊教育（現・特別支援教育）の道を歩むことになったのです。

採用されて三年目、私は二校目の養護学校に赴任しました。教員として、まだ駆け出したばかりの私でした。その時に出会った教頭先生は、これまでずっと特別支援教育に携わってこられた方でした。見識もあり、いつも周りの教員に気を配ってくださる大変立派な教頭先生でした。

その教頭先生が、ある時、私に次のようなことを話されたのです。

「〇〇先生、こんな言葉を知ってる？『実るほど頭を垂れる稲穂かな』という言葉だよ。これは、稲が実を熟すほど穂が垂れ下がるように、人も学問や徳が深まるにつれ謙虚になることだよ。」

私は、その年になって初めて聞いた言葉だったように記憶しています。

私たち教員は、毎日、児童生徒と接し、いつも教えている立場にいます。そして、いつも教える立場にいと、ついつい自分は偉いんだと勘違いし、錯覚してしまうのです。教頭先生が話された一節を、後で辞書で調べてみると、続けて「小人物ほど尊大に振る舞うものだ。」と、説明してありました。

教頭先生から教えていただいた言葉は、当時の話していただいた情景と一緒に、いまだに脳裏から離れません。教員として、また人間として、とても大事なことを教えていただいたと今でも感謝しています。